

メキシコ・ベラクルス州の輸出農業

ひか べ ひろ し
岡 部 広 治

- I はじめに
- II サトウ産業の実態と問題点
- III コーヒー産業の実態と問題点
- IV むすび

I はじめに

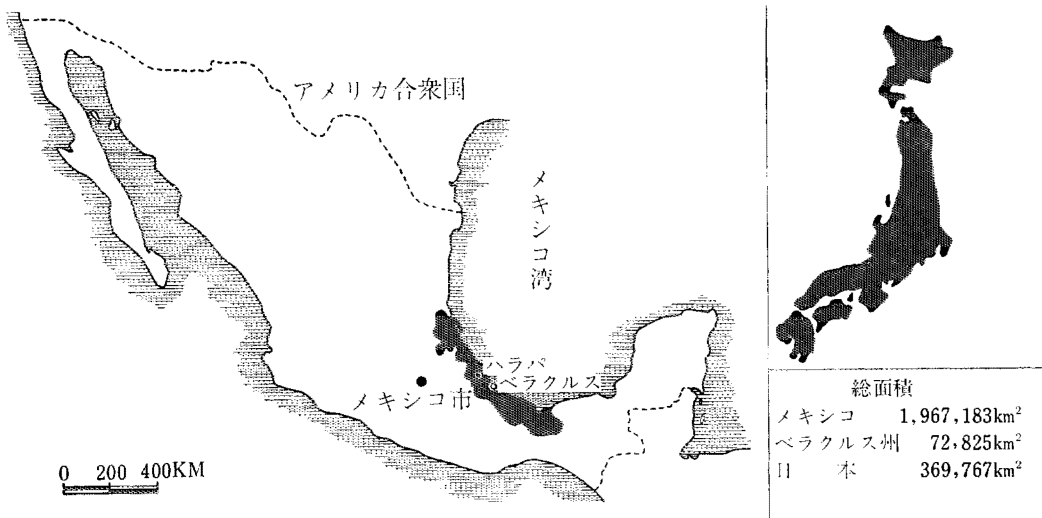
ベラクルス州の開発の歴史は古く、現在も、メキシコにおいてもっとも発展度の高い地域のひとつを含んでいる。この州の名（そして、メキシコのもっとも重要な港市の名でもある）そのものが、1519年メキシコの「征服者」エルナン＝コルテスがメキシコではじめて建設した都市に命名した「真の十字架の豊かな村 Villa Rica de Vera Cruz」に起源をもつ。この港と首都メキシコ市とを結ぶ道路（本来は現在の州都ハラパ市経由、のちに、コルドバ市・オリサバ市経由のものが開かれた）に沿う地域は、「ガレオン道」として、植民地期を通じて繁栄した。オリサバ市経由でベラクルス市・メキシコ市間にメキシコ最初の本格的鉄道が開通したのは、1873年であった。

現在(1970年センサス(註1)によれば)ベラクルス州は、メキシコ全土の3.7%(7万2815平方キロメートル、32の連邦構成行政単位のうち第11位)を占めるにすぎないが、人口においては7.9%(381万5000、第3位)を占めている。人口密度は52.4人/km²で、全国で第9位である。この比較的高い人口密度は、ベラクルス市・メキシコ市間の上記幹線道路を中心とする州の約5分の1を占める中部山地部における高い人口密度によっている。

この中部山地部こそがベラクルス州の心臓部であり、こここそが、ベラクルス州を農業州たらしめ、その農業をサトウ産業とコーヒー産業という輸出農業で特色づけている。ミサントラ、ハラパ、ウアトゥスコ、フォルティンを結ぶ線上の渓谷帯は、とりわけ高温多湿にめぐまれ、生い茂る樹木のあいだに随所にみあたるサトイモ科の植物の葉は長さ1メートル余に及び、シダ類も高さ1.5メートルにもたっし、いかにも豊かな地方という感を与える。この地域がコーヒーの主産地であり、その周辺のいくぶんか低い地域がサトウキビの主産地である。

もちろん、州全体としてみると、メキシコの他のいずれの地方ともおなじく、農業生産額において第1位を占

第1図 ベラクルス州の位置



めているのはトウモロコシ(1971年の数字によると(注2)13億ペソ)であり、フリホール豆も第3位を占めている。しかし、そのあいだにサトウキビがわりこみ(8.5億ペソ)、第4位にコーヒーが次いでいる(3.3億ペソ)。これら2産品は、メキシコの輸出品目中、綿花(1969年の数字によると(注3)17.5億ペソ、11.6%)について、それぞれ2位、3位(11.5億ペソ、7.5%、8億ペソ、5.4%)を占め、この州の輸出農業的特徴をきわだたせている(注4)。

また、もちろん、この州においては、オリサバ周辺に歴史的伝統を有する綿紡織工業があり、北部ポサニリカ付近および南部ミナティランには20世紀にはいつてから豊かな石油資源を利しての石油産業が開花し、また、1953年に建設されたメキシコ鋼管(TAMSA)を中心にベラクルス市近郊に近代的重工業も勃興しつつある。そして、ベラクルス大学経済学部による1965年州内粗生産の産業別構成推計では、第1次部門20%、第2次部門45%、第3次部門35%となっていて(注5)、あたかも州の主要産業が製造業であるかのような感をいだかせる。しかし、第1に、製造業の中に、本来ならば農業の部門に入れてしかるべきと考えられる製糖部門、コーヒー精製部門なども含まれていることを考慮にいれなければならない。とくに前者は、1965年工業センサス(注6)によると、従業員数1万4485人(州内全製造業において22.3%)、総生産額13億1000万ペソ(22.4%)をも占めるものである。第2に、いうまでもなく、製造業においては、その巨大な年生産額にまどわされてはならない。原料費・減価償却額などがかなりにのぼるからである。かりに、主要生産部門について、雇用者(職員および労働者)に支払われた金額の2倍の額を算出してみると、以下のようになる。

| | |
|---------|-------------|
| サトウキビ産業 | 15.0億ペソ(注7) |
| コーヒー産業 | 3.0億ペソ(注8) |
| 綿紡織工業 | 1.8億ペソ(注9) |
| 鋼管工業 | 2.2億ペソ(注10) |
| 石油産業 | 8.9億ペソ(注11) |

上の数字とあわせて、1970年センサスによる産業別労働人口構成をみると、ベラクルス州における農業の優位、なかでもサトウ産業とコーヒー産業の重要性はいよいよ明瞭となる。12歳以上の州内労働人口は100万で連邦区について第2位を占めているが、その中での第1次産業従事者は53万、メキシコ連邦構成行政単位中第1位である。

このように、州内においてもメキシコ内においても重要な意味を有するサトウ産業とコーヒー産業は、どのよ

うにいと生まれ、どのような問題をかかえているのか。1972年5月と8月との2回にわたり、計1週間前後の直接調査にすぎなかったが、その調査の結果知りえたことを、以下に記すことにする。

(注1) 1970年センサスはまだ公刊されていない。Secretaría de Industria y Comercio, Dirección General de Estadística, *Anuario estadística de los Estados Unidos Mexicanos: 1968-1969*, México, 1971によった。

(注2) Gobierno de Estado de Veracruz, Dirección General de Agricultura (en coordinación con la Agencia General de S. A. G.), *Producción agrícola del Estado: ciclo 1970-1971*, Xalapa, 1971.

(注3) *Anuario estadístico: 1968-1969*.

(注4) 全国生産額に占めるこの州の割合は、サトウキビ50% (1966年, *Anuario estadístico: 1968-1969*), コーヒー30% (1969年, Instituto del Café, S. A. G., *Estadísticas del café*, México, 1969)である。なお、コーヒーの場合、1960年には36% (*Anuario estadístico: 1962-1963*)で第1位であったが、1969年にはチャパス州(39.9%)について第2位となった。

(注5) Gobierno Constitucional de Veracruz, *Veracruz 1971: Información socioeconómica*, 1971.

(注6) SIC, Dirección General de Estadística, *VIII censo industrial 1966*, México, 1967.

(注7) *VIII censo industrial*には原料費(補助原料費・梱包費も含む)として計上されているのは6.2億ペソ。その年のサトウキビ生産額は8.3億ペソであったため(*Anuario estadístico: 1968-1969*), 後者を原料費として Censo に計上されている人件費を比例的に増した。農業関係生産費は10%とした。

(注8) コーヒーは *café cereza* の生産額であるため、その額から10%を減ずるにとどめた。

(注9) ベラクルス州の綿紡織企業は、他のそれに比して規模が大きい。プエブラ州の総生産額11.3億ペソ、企業数238; 連邦区の3.8億ペソ, 74にたいし; 3.2億ペソ, 4である。

(注10) 工業センサスでは、最低企業数3以上となるように連邦構成行政単位が適当に合算されている。鋼管工業の場合、アグアスカリエンテス州のそれと合算計上されているが、TAMSAの規模が圧倒的に大きいこと(労働者3200名、年生産額8億ペソ)を考慮に入れて、センサスの合算数そのものを基礎として計算

した。

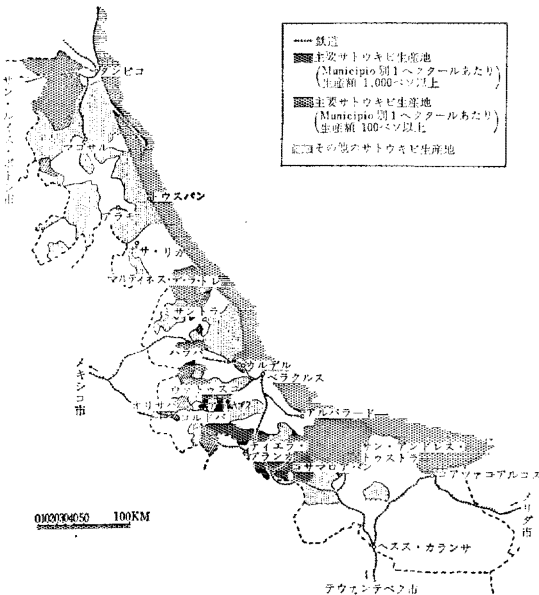
(注11) *VIII censo industrial* に数値は発表されていない。*VII censo industrial* (1960年) の数値の比をもとに、*Veracruz 1971* に計上されている従業員数および生産額とから計算された人件費の算術平均値をもって計算の基礎とした。

II サトウ産業の実態と問題点

ベラクルス州におけるサトウキビ生産の地理的分布は、第2図のとおりである。

サトウキビ生産と製糖工程は、一体のものとして考えられなければならない。(これら両者をあわせてサトウ産業とよぶ。) 第1に、サトウキビは、刈取り(サフラ *zafra*, 一般に12月~4月)ののち、茎だけにして(パテイ *batey*) 製糖工場(インヘニオ *ingenio*) に運びこまれ、第3図のような工程をへて、サトウとなつてはじめて運搬可能な商品となりうるからである。第2に、メキシコにおいては、1943年9月22日の法令で、政府が各インヘニオのために、その最大碎搾能力にみあうサトウキビ供給地域を画定し、その区域内においてはサトウキビ栽培以外のための農園が禁止されるかわりにインヘニオ

第2図 サトウキビ生産の地理的分布



(注) Gobierno Constitucional de Veracruz, *Veracruz 1971: Información socioeconómica de los municipios* 別サトウキビ生産表から計算, 作製。

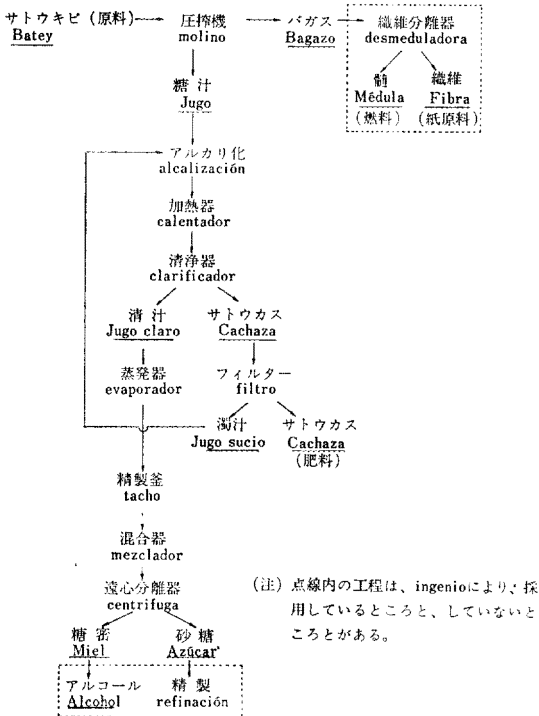
はその区域内で生産されるサトウキビのすべてを法定価格で取得するよう義務づけられることが、規定されている(注1)からである。したがって、インヘニオの所在地も、サトウキビ生産と同様な地理的分布をなしている。また、調査もインヘニオ中心におこなわれることを必然にした。

今回は、コルドバ市南郊のサン=ミゲリート *San Miguelito* 工場と、市の東約25キロ、アトヤク近くにあるエル=ポトレーロ *El Potrero* 工場とを中心に調査した。両工場とも、コルドバ郡(ムニシピオ *municipio*) 役所によれば、経営状態がきわめて良好とのことであったが、両者の規模にはかなり大きな差がある。主要な指標は以下の通り。

| | サン=ミゲリート | エル=ポトレーロ |
|------------|------------|--------------|
| 年間サトウキビ消費量 | 35~40万トン | 100~120万トン |
| 年間サトウ生産量 | 3.5~4.0万トン | 11.5~13.7万トン |
| 労働者数 | 123人 | 300人 |
| 常時雇 | 182人 | 500人 |
| 季節雇 | — | 500人 |
| 臨時雇 | — | 500人 |

サン=ミゲリートが中位あるいは下位の規模であるのにたいし、エル=ポトレーロはメキシコ第3位の生産量をほこる大工場である。両者とも稼働率はきわめて高く、前者はほとんど100%ちかく、後者は日間サトウキビ消費能力1万2000トンにたいし実際消費量は9000~1万トンである。前者が稼働中であつたのにたいし、後者は5月10日にサフラを終えすでに機械補修作業にうつっていたため、正確な比較はできなかったが、前者においては「町工場」の感がつよく、サトウキビの髓(メドゥラ)のさかんに舞う中を労働者たちが汗にまみれて働いていたのにたいし、後者の方は、大型で近代的な機械をそなえ(8年前に全面的な拡張工事を終えた)、作業場もかなりよく整備されていた。労働条件もエル=ポトレーロの方がかなり良好である。サン=ミゲリートが法定最低賃金33.25ペソを労働者に支払っているのにたいし、それをいくぶんか上回る37.50ペソが平均賃金である。さらに、職長以上には光熱・水道料をふくむ住宅が無償で供与され、工場長(Director general)の豪壮な邸宅(庭の一角に直径30センチメートルものマンゴの木が十数本もみられた)、支配人(Gerente)の4寝室と200坪もの芝生の庭園のある住宅をはじめ、管理職員の瀟洒な住宅が会社の運動場を見おろして建ちならんでいる。このようなことを可能にしている条件は、大規模というだけでなく、サトウキビ1トンあたりサトウ生産量115キログラムというメキシコ

第3図 精糖工程



いるといえよう(注2)。なお、エル=ポトレーロも、もちろん株式会社 Sociedad Anónima ではあるが、実際には、工場の近くにいまだに巨大なアシエンダを有する、かつのアセングード(大地主)の「単一の主人 el único dueño」の支配下にある。1943年の法令で大蔵・経済・農業諸省に「製糖工場の諸条件改善のための投資計画を作製する」よう義務づけた(注3)とはいえ、また、最近政府が直接に関与するインヘニオの数が増加し全国生産の約35%を占めるにいたった(注4)とはいえ、「1960年から1969年まで、サトウキビ栽培面積は29%、その単位面積あたり収穫量は17%増加したが、工場の生産は1ヘクタールあたりサトウ5.2トンから5.9トンに変わったにすぎない」(注5)という有様である。

第2の問題点は、サトウキビ生産者 productores de caña とインヘニオとの関係である。1943年および1944年の法令によれば、インヘニオは政府によって画定されたサトウキビ生産地域において生産されるサトウキビ全量を、標準精白糖1キログラムあたり卸値に、一級地域における各サフラのサトウキビ1トンあたり平均サトウ生産量(最低で80キログラム)の50%を乗じた価格で買いとらなければならない(注6)。すなわち、製糖費(もちろん、減価償却費も含む)は、最終生産物の50%という計算である。サン=ミゲリートの場合、その工場長は「個々の成熟度 madurez を調べたのち、サトウキビ1トンあたり90ペソで買います」とだけのべたが(現在、精白糖1キログラムあたり1.80ペソであるので、このかぎりでは問題ない)、エル=ポトレーロの場合はもうすこしくわしく知りえた。会社は、サトウキビ納入の義務を負う約3000名の生産者と、サフラの直後に次のサフラにかんする生産契約を結ぶ。その中味はおもに融資条件である。具体的には、1ヘクタールあたり、耕耘についてXペソ、第1回施肥についてYペソ、……、それぞれの利子xペソ、yペソ、……という会社側の規準にしたがって(最後のサトウキビの刈取り・運搬についての融資だけは無利子である)、契約がむすばれる。また、病気・傷害の場合にも定められた額の融資がおこなわれる。もちろん、この契約はあらかじめ、サトウキビ生産者同盟 Alianza de Productores de Caña とよばれる農民たちの組織と会社とのあいだで検討される。法律的には、畑から工場へのパティの運搬費、医療費(注7)などを生産者の売渡し価格から天引きするように定められており、この点の問題は別の次元にぞくするが、以上のように、融資をテコにして、法令で定められている原料確保を、いっそう確

第1の生産性を有すること、最終生産物がサン=ミゲリートのように褐色ザラメ糖でなく、輸出用の純白の最上質品であることにもよる。サン=ミゲリートが製糖工場だけを中心として、事務所(計理を含む)を首都にしているのにたいし、エル=ポトレーロにあつては、生産関係の事務所は現地にあり、しかも、他に姉妹工場として、Constructora “Paraiso” という機械工場、Ron “Potrero” というラム酒醸造工場(現在一時休業中、ちかく再開予定とのこと)を経営しているという点にも、その近代性がうかがえる。

こうして、サトウ産業における第1の問題点として、インヘニオの近代化がうかがいあがる。製糖業が植民地期以来の古い伝統を有するだけに、そして、現存のインヘニオの多くもかなりの伝統を有するだけに、その近代化には多くの障害があると考えられる。今回の調査の対象とした両工場とも、鉄道の便は有するが、サン=ミゲリートがコルドバという都市に近接するにたいして、エル=ポトレーロの場合には、コルドバ・ベラクルス間の国道150号線から工場までの20キロメートル余はまだ舗装されていない。伝統と都市からの乖離にたいする抵抗が、サトウキビ畑の只中での近代工場設立をさまたげて

実に行っているあたり、工場主が「単一の主人」であることとともに、両者の関係に前資本制の要素を匂わせるものがあるように思われる(注8)。この工場にバテイを納入する農民の場合、「75%を占める」のはエヒード構成員である。しかし、それは個人耕作制であり、実際には零細農とかわりない。それらエヒードのひとつ“El Potrero y anexo”においては、エヒード構成員のひとりあたりの所有地面積は平均6.5~8ヘクタール、総生産額は平均1万8000ペソ、多いときは3万ペソにのぼることもあるが、前借額がかなりにのぼるため、年間収入は4000~5000ペソにすぎない。そして、これらの農民から工場労働者(季節雇、臨時雇)も補給される。

第3の問題点は、作業の季節的性格にある。製糖工場の運転期間は、サトウキビの収穫期すなわちサフラの約150日間に過ぎられない。その間は昼夜を通して3交替制でフル回転させられるが、その余は、ほとんど整備保守に仕事がかされる程度である。労働者数は、常時雇がきわめてすくない。この労働力需要の差をいかに処理するかの問題は、未解決である。季節雇・臨時雇を農民から補給するというその場しのぎの方法(製糖工場で労働力需要が大になるときは、収穫の面でも労働力が最高度に必要ときである)、またエル=ポトレロのように、工場の稼働期間を150日から180日にするよう増産を計画するなどの措置が構想されているとはいえ、根本的な解決とはなりえない。糖蜜の加工、アルコール醸造を基礎とする化学工業をも含めての全般的な計画化、あるいは、地域的な産業の総合的な計画化が必要とされよう。

第4の問題点は、製糖工業にたいする国家的統制の中にみいだされる。1938年、1929年世界大恐慌によりひきおこされたサトウの極端な過剰生産、ついで過少生産というような需給のアンバランスを調整するため、サトウ生産者連合 Unión Nacional de Productores de Azúcar, S. A. (UNPASA) が設立された。この半政府機関は、本来、サトウの分配・販売を独占する機能を与えられたが、その後、政府によりバテイの価格およびサトウの価格まで決定されるようになって、製糖工場は一種の「委託加工 máquina」をおこなうにすぎなくなった。しかも、このさいの国家統制は、既存のインヘニオの利益を尊重するという大原則のもとにおこなわれている。こうして、サトウキビ生産者の利益が完全に擁護されないだけでなく(たとえば、融資の不足)、インヘニオの側にも企業意欲が失われる傾向がある。

第5の問題点は、副産物の利用にかんするものである。

サン=ミゲリートの場合には、主要な副産物であるパガスを髄 médula と繊維 fibra に分けて、後者をオチサバにあるキンパリー=クラークの製紙工場に供給している。これにたいして、エル=ポトレロにおいては、パガスがきわめて高いカロリーを有しているとの理由で、すべて燃料として消費している。メキシコ経済全体からみて、現在、製紙原料および紙製品の輸入が輸入総額の5%ちかくを占めている以上(1969年に11.7億ペソ)、(注9)パガスの燃料としての消費にはかなり疑問をいだかざるをえない。

最後に、メキシコのサトウ産業は、需給のアンバランスになやまされている。1968、1969年の需給状況は以下のとおりである(注10)。

| | 1968年 | 1969年 |
|----------------|-------|-------|
| サトウ生産量(1000トン) | 3,164 | 3,158 |
| 国内消費量(") | 1,625 | 1,733 |
| 輸 出 量(") | 641 | 604 |
| 剰 余 | 898 | 821 |

毎年80万トンを超える量が蓄積されていくこととなる。1968年には、すでにストックが50万トンにたっしていたのである(注11)。輸出の問題は、とくに複雑である。総輸出货量のほとんどすべてがアメリカ合衆国向けである(注12)。1961年以來のアメリカ合衆国のメキシコからの輸入割当量 cuota の漸増により、1ポンドあたり2セントという世界市場よりも、5.5~6.5セントという特別価格を設定しているアメリカ合衆国市場につよく牽引されたからである。しかし、このアメリカ合衆国市場の安定性もかなり疑わしい。エル=ポトレロでは、また倉庫を拡張しなければならないという不満も聞かれた。大きな外貨獲得源であるだけに増産のかけ声が強いが、それだけに精密な計画的生産が必要とされるのではないかと思われる。

(注1) Sergio Maturana Medina y Iván Restrepo Fernández, *El azúcar: Problema de México (Un estudio regional de Michoacán)*, México, 1970, pp. 47-49.

(注2) これには、1944年3月29日の法令でバテイのインヘニオへの運搬費をサトウキビ生産者の負担にすることが規定されたこともあづかっている。

(注3) Sergio Maturana Medina y Iván Restrepo Fernández, *op. cit.*, p. 47.

(注4) *Ibid.*, p. 41.

(注5) *Ibid.*, p. 46.

(注6) *Ibid.*, p. 48.

(注7) 1958年11月22日の法令により、医療費としてサトウ1キログラムあたり1.5セントボ、サトウキビ総局 Dirección General de la Caña de Azúcar のために4分の1セントボ、サトウキビ生産者の組合のために20分の1セントボが、インヘニオへの売渡し価格から天引きされることが、規定された。実際には、その額はかなりにのぼり、1966年のサトウキビ生産者ひとりあたりの平均は、それぞれ397.00ペソ、66.15ペソ、13.25ペソ、計476.40ペソであった。

(注8) 「サトウキビ生産者 productor de caña de azúcar あるいは cañero」という正式呼称のかわりに、「隷農」を意味する“colono”という呼称もまだ使われている。

(注9) *Anuario estadístico 1968-1969.*

(注10) *Ibid.* ただし、サトウ生産量は、サトウキビ生産量を10で除した数値とした。

(注11) Sergio Maturana Medina y Iván Restrepo Fernández, *op. cit.*, p. 44.

(注12) *Ibid.*, p. 43. 上表と数字がいくぶんかことなるが、1969年の総輸出货量60万5553トン中60万4919トンがアメリカ合衆国向けと、されている。

III コーヒー産業の実態と問題点

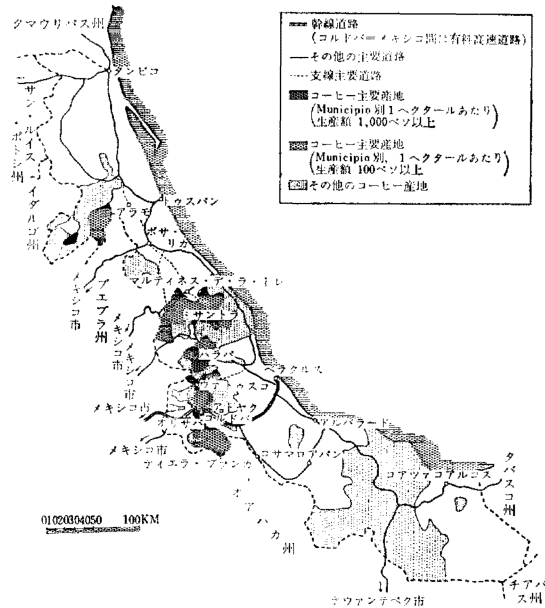
ベラクルス州におけるコーヒー生産の地理的分布は、第4図のとおりである。

サトウ産業と同様、コーヒー豆生産とコーヒー精製工程(トースト工程以下は含まれない)とは、一体のものとして考察されなければならない。コーヒーの木から収穫されたコーヒー豆 *café cereza* を、第5図に示した工程で加工してはじめて、貯蔵可能、遠隔への運搬可能な商品となるからである。

第5図の加工工程を、ハラバ市郊外の農牧省所属のメキシコ=コーヒー庁 Instituto Mexicano de café の実験農場で聴取した技術的側面を中心に、いまずこし説明すると、以下のようである。

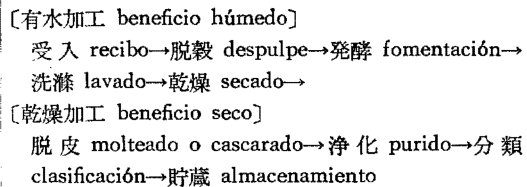
コーヒーの木 *mata* 1本からは20~30キログラムのコーヒー豆 *café cereza* が収穫できる。この *café cereza* は水分を50~60%含んでいるため、その水分を12%にまで下げなければならない。この工程が有水工程であり、その最終生産物が *café en grano con cáscara* あるいは

第4図 コーヒー生産の地理的分布



(注) 第2図に同じ。

第5図 コーヒーの加工工程



cafépergamino である。その後、乾燥工程を経たものは、*café en grano sin cáscara* あるいは *café verde* とよばれる。そして、*café cereza* 250キログラムから46キログラム(1キンタル *quintal*)の *café verde* が生産される。ただし、コルドバ地方においては1キンタルの *café verde* を生産するために要する *café cereza* の量は260キログラムである(注1)。

しかし、この加工工程は、サトウキビのそれとはことなっており、それほど大きな規模の工場を必要としない。熱源を必要とするのは乾燥工程のみであるが、それもほとんど天日によるのである。実験農場に展示されている実物の装置はわずかに6平方メートルを占めているにすぎなかった。もちろん、大規模な加工工場も建設可能であり、この方が経済的効率が良好ではある。しかし、このよう

に小規模でもって一応の最終生産物である café verde まで生産しうことは、サトウ産業とくらべてはるかに生産額が少ないこととあいまって、この産業を逆につかみがいものとしている。実験農場の加工部長によると、コーヒー園 cafetera の92%は3ヘクタール前後であり、小農による独立のコーヒー園もかなり存在し、林のあいだに放置されているものもあるからである。現に、ハラパ市近郊においてコーヒー園はほとんど自然成長にまかされ、実験農場のそれと、ごく一部をのぞいては、それと判別することがむずかしいような状態であった。

今回は、ハラパ市近郊にあるかなりの規模のコーヒー加工工場ラス=アニマス Las Ánimas と、その加工工場にコーヒー豆を納入しているエヒード「エスタンズエラ Estanzuela」を中心に調査した。

「75%を占める」(注2)エヒードは、サトウキビ生産の場合におけるとおなじく、「分割地エヒード ejido parcelario (注3)」であり、「エヒード」というよりも「零細農」といった方がふさわしい。エヒード「エスタンズエラ」の場合、エヒード構成員ひとりあたりの分割地は7ヘクタール、このエヒードの議長 presidente は、そのうちわずか1ヘクタールをコーヒー栽培にあてているにすぎない。彼自身によれば、コーヒーの木1本あたりからのコーヒー豆収穫量は約10キログラム(これは、実験農場の加工部長ののべた20~30キログラムに比べれば、きわめて少ないが、ラス・アニマス加工工場の支配人によれば良好な場合でせいぜい2キログラムとのこと。あまりにも差がありすぎるが、直接観察したところでは、実験農場のコーヒーの実のつき具合と比較して、後者の方が現実にちかひように思われた)、コーヒー栽培から生ずる年間収入はわずかに7000ペソ(総生産額1万ペソから必要経費3000ペソを減)とのことである。Café cereza の価格は1キログラムあたり1.20~1.50ペソ(注4)であるため、逆算すると、総生産量は8300~6700キログラムのところとなり、1ヘクタールあたりに植付けられるコーヒーの木が5000~6000本であることから計算しても、1本あたり10キログラムという収穫量はいかにも疑わしい。彼は、129名のエヒード構成員、1000ヘクタールを擁するエヒードの議長でありながら、コーヒー栽培のことにはあまり関心を有していない(「議長になってからまだ8カ月にしかならないので、エヒードの全体についてはよく分からない」と言訳しながら語ったが、コーヒー栽培についても正確な数字をつかんでいないように思われた)。事実、彼はパン製造職人として近くの製パン屋で定職定

収入を得ており、コーヒー栽培による自分の収入を算出するさいにも肥料のほか、café cereza 1キログラムあたり20セントボの耕作労賃と30セントボ(食事つき)の収穫労賃とを計算に入れていたが、ここからも明瞭なように、ほとんどまったくコーヒー栽培に手をくだしていない。議長がこのようである以上、農民の生活向上のために創設されたエヒード制度は現実にはまったく機能していないと言えよう。

コーヒー加工工場ラス=アニマスを訪問したさいは、まったく操業していなかった。100メートル四方以上もあるコンクリートうちの天日乾燥場には、労働者の影もみあたらない。午後3時前後というメキシコでは昼休みの時間であったためもあるが、何よりも、収穫前の時期とて加工作業を中止していたためであった。この工場は、古くからの大地主の所有にかかるものであり、調査した2製糖工場の場合とことなつて約1000ヘクタールの自家コーヒー園(果樹園も含む)をも持っている。現行農地改革法により、コーヒー園の場合、ひとりあたりの最高所有可能面積は300ヘクタールにかざられているが、この工場は会社組織を採用しているため、複数出資者の名義でこれだけのコーヒー園あるいはコーヒー=プランテーションも可能になるのである。加工工場の年間 café cereza 消費量は2400~7500トン、ふつう、その約3分の1は自家コーヒー園から供給され、その余は近隣のエヒード農民および貧農から調達される。Café cereza の買付価格は現在1キログラムあたり1.25~1.20ペソ、加工後のcafé verde の価格が1キログラムあたり10ペソ(注5)、café cereza 250キログラムからcafé verde 1キントル(46キログラム)が生産されるとすれば、café cereza 250キログラムを加工するごとに147.5~160.0ペソの差額が加工賃として算出される。したがって、この加工工場は、少ないときで141.6万ペソ、多いときには480万ペソの加工賃を手に入れることができる。減価償却費を投下資本の10%とし、1965年工業センサスのかかげるコーヒー加工部門のベラクルス州に存在した93工場の数値をもとに計算すると、この工場の純益(労賃を加工工程で付加された価値の50%として計算すると)は、最低で125万ペソ、最高では428万ペソ(実際には、設備投資は同額であるので、これをさらに上まわることとなる)にもぼる。これに、さらに、café cereza 生産により、少なくとも50万ペソ、多ければ200万ペソちかひ純益が付けくわえられる。法律により、総生産の20%は国内に、とどめおかねなければならないことになっているが、実際に

は国内需要がそれのみあうほどなく、この工場でもすでに3万1000キントルもの在庫を有するとの話であった。それにしても、この工場に *café cereza* を提供しているエヒード＝コーヒー生産農民の経済状態とはあまりにもかけはなれている。

コーヒー産業における第1の問題点は、現実の直接生産者のあまりにも貧しい生活である。コーヒー生産にかぎらず、一般的にメキシコにあって、農民の生活がきわめてミゼラブルであることは周知の事実である。とくに、農民の生活向上を目的としたエヒードにおいて、エヒード構成員が貧農同様の生活を強いられているという現実を目を閉ざすわけにはいかない。この産業においては、その特性（かつての採集経済の性格がつよく残存している）から、サトウキビ生産におけるような組織性もみあたらない。そして、コーヒーの生産性を高めるために設立されたメキシコ＝コーヒー庁のすばらしい実験農場が目と鼻の先にありながら、その存在については知っているものの、その技術を受け入れようとはしない。このことは、実験農場におけるコーヒーの木1本あたり20キログラムという収穫量と、その他の一般のコーヒー園における多くて2キログラムという収穫量とのあまりにも大きすぎる差に、歴然としめされている。しかも、ラス＝アニマスのように加工工場に付属しているコーヒー園においても、コーヒーの木1本あたり2キログラムという低い生産性であることは、近代企業として経営されているのではなく、植民地時代以来の伝統的なコーヒー栽培の上にあぐらをかいているとしか、いいようがない。また、*café cereza* の生産的消費量の年による驚くべき大差も、この前近代性を物語っている。

コーヒー産業の第2の問題点は、生産と消費とのアンバランスである。現在、メキシコにおけるコーヒー生産量は年間290万袋（1袋saco＝60キログラム）。そのうち、50%余の150万袋は輸出される（注6）。輸出量は、世界のコーヒー生産国のあいだの会議で定められる割当量*café*によるもので、勝手に増すことはできない。それゆえ、約140万袋は国内で消費されなければならない。しかし、これだけの消費力は国内になく、在庫が増大する傾向にある（注7）。1971年にメキシコ国民は350万袋の「コーヒー」を消費したが、実際に消費した*café en grano* はわずかに100万袋であり、その差をなす250万袋は統計上では「コーヒー」と計上されている澱粉であった（注8）。具体的には、コーヒー挽き工場において、砂糖・ガルバンソ豆・米などのこがしたものをコーヒーに混入するのであ

る。ここに、たしかに過少消費の一因はある。それゆえ、今年（1972年）5月、厚生省 *Secretaría de Salubridad y Asistencia* 提出の「煎りコーヒー加工・販売法」が国会を通過し（注9）、公けに販売されるコーヒーは100%純粋でなければならないこととなった（注10）。たしかに、現在コーヒーをたしなむことのない約200万のおもに農村住民にコーヒーを普及するとともに、公けに販売されるコーヒーを100%純粋にすれば、過剰生産ではなく過少生産となり、とりわけ単位面積あたりの収穫量を増すという形での増産が必要となるかもしれない。しかし、法律が文面通り守られないというメキシコの現実を無視するとしても、このような方法でのみこの問題が解決されるとするのは、楽観的にすぎるであろう。かりに、現在コーヒーの木1本あたり2キログラムの *café cereza* を収穫している農民あるいは「資本家」が、メキシコ＝コーヒー庁の実験農場でおこなわれている20キログラムの収穫量の半分の10キログラムの収穫量の半分の収穫をあげたようになるとすれば、たちまち過剰生産になることは、明らかである。それに、外貨獲得のための輸出用増産ならば、ともかくも、国内消費向けの増産の場合には、はたして、メキシコ国民の生活向上にとって有利にはたらくかどうか、大いに疑問の余地がある。ここでは、既存の権益にたいする顧慮を排除した根本的に次元をこととした解決方法が必要とされているように思われる。

（注1） コーヒー産業における量単位は、かなり複雑である。おもなものを記すと：

Café cereza の場合には kg, ton;

Café pergamino の場合には quintal (=57kg);

Café verde の場合には quintal (=46kg);

大量の生産物を一般に示す場合にはsaco (=69kg);

統計的に示す場合には sacco (=60kg)

である。

（注2） サトウキビ生産の場合にも、一般にこういわれている。しかし、SIC, *Dirección General de Estadística, IV censos agrícola-ganadero y ejidal, 1960, México, 1965*によると、次のような表がえられる（ベラクルス州について）。

| | Caña de azúcar (plantilla) | | Caña de azúcar (socas) | | Café cereza | |
|----------------|----------------------------|------------|------------------------|------------|-------------|------------|
| | 耕作面積 (ha) | 生産額 1000ペソ | 耕作面積 (ha) | 生産額 1000ペソ | 耕作面積 (ha) | 生産額 1000ペソ |
| 全耕作地 | 46,097.4 | 81,853 | 73,737.1 | 144,125 | 111,826.8 | 370,756 |
| エヒード | 16,697.4 | 30,199 | 37,699.1 | 69,418 | 32,914.1 | 114,601 |
| 全耕作地にエヒードの占める% | 36.2% | 36.9% | 51.1% | 48.2% | 29.4% | 30.9% |

いずれの場合にも75%には、ほど遠い。なお、生産単位（エヒードの場合には、エヒード構成員総数をもってする）でも、総数26万6369のうち、エヒード構成員は13万4859であり、その割合は50.6%にしかならない。

（注3）これにたいし、共同耕作制をとっているものは“ejido colectivo”とよばれる。この種のエヒードは、年々その数を減少させ、現在では、ラグーナ地方（中北部の綿作地帯）でも少数派となっている。

（注4）Instituto Mexicano del Caféのハラバ近郊実験農場加工部長による。Las Ánimas加工工場支配人は1.20~1.25ペソといった。

（注5）Anuario estadístico 1968-1969によれば、café beneficiadoの precio medio rural (pesos por tonelada)は、1965年——7500、1966年——6500、1967年——8300、1968年——8000、1969年——8500であった。現在の政府で規定しているコーヒー価格（小売）は1キログラムにつき15ペソ。

（注6）Instituto Mexicano del café, *Estadísticas del café* による。

（注7）Las Ánimas加工工場の支配人は、法律で20%は国内に留めておくよう定められているから在庫が増加するとのべたが、それほど輸出市場は明るくなく、ここにのべた方が現実に近いと考えられる。

（注8）*El Día*, 4 de mayo de 1972.

（注9）*El Día*, 5 de mayo de 1972. しかし、法律として公布されたという記事は、その後みあたらなかった。Instituto Mexicano del caféの加工部長は、5月24日に面接したさい、なんらの留保なく「最近制定された法で……」とのべた。

（注10）法案では、サトウ azúcar・黒サトウ piloncilloあるいは粗糖 mascabado を10%まで混合していいとあったが、議会の審議のさい、この点は削除修正されて、100%純粋のコーヒー販売を義務づけることとなった。

IV む す び

サトウ産業とコーヒー産業は、ベラクルス州の伝統的な輸出産業であり主要産業である。それゆえ、これらふたつの産業が上にのべたような諸問題をかかえているということは、ベラクルス州の経済発展の展望に暗い影をなげかけている。人々に快い慰みを与えるサトウとコーヒーが生産の次元で深い病根におかされているように、

緑濃く、美しい港湾にめぐまれ、霊峰オリサバ山をはるかに眺める、いかにも豊かなベラクルス州の経済も病んでいるのである。

ベラクルス州は、これを意識してか、あるいは、意識下に感知してか、新しい別の産業に活路を求めようとしてきたし、いまでもその努力をしている。オリサバ市付近に栄える綿紡績工業は、上の2産業とともに古く、原料である綿花は遠くはなれたラグーナ、ソノラなどから買付けなければならなくなり、その製品はおもにメキシコ市に向けて出荷されている。20世紀にはいって急に脚光を浴びるようになった石油産業も、じゅうぶんに精製されないまま、パイプ＝ラインでメキシコ市やサランカの石油工場に送られている。20年ほど前に設立されたTAMSAは、年間鋼管生産量19万トンを誇るとはいえ、その原料はミチョアカン州アパツィンガン（鉄鉱石）やメキシコ市（屑鉄）に仰ぎ、その製品の80%はPEMEXに納入され、14%はメキシコ市を中心とする国内市場に、6%は海外市場に送られる。ベラクルス州自体の中に、メキシコ最大の鋼管製造工場の製品を受入れるだけの基礎構築が作りあげられていないからである。現在も、TAMSAのあるベラクルス市周辺、州都ハラバ市周辺に工業団地が計画され、企業誘致がさかんにおこなわれている。しかし、文字どおり「地についた」2大産業のかかえる問題を未解決のまま放置したのでは、いかなる企業を誘致したところで、その仕事を単に「委託加工 máquila」に終わらしめ、州経済における enclaved economy を形成させるのにとどまるのではないだろうか。たしかに、一定数以上の新しい企業が進出した場合には経済発展に拍車かけられる可能性はあろう。しかし、その場合の経済発展は「上からの」それであり、禍根を将来にのこすこととなろう。

かくして、道はけわしく困難ではあるが、ベラクルス州の土壌に深く根ざしたサトウ産業とコーヒー産業のかかえる諸問題を解決するのが、州経済発展のための唯一の道と考えられる。それは、もちろん、諸問題のひとつひとつの個々の解決、とりわけ安易と思われる技術的問題の解決から手始めにというような方法では達成されないであろう。諸問題は、内部的に深く絡みあって提起されているからである。たとえば、産業合理化というような形で、従来の産業に従事していた労働力の一部を他の産業に置換するというようなことでは、根本的な解決は不可能である。すでに「上からの」発展の道を迎えてきた、これら2産業の発展の方向を180度転換させることが必

現地報告

要と思われる。一言でいえば、「構造的変革」が必要とされているのである。

最後に、メキシコ全体についても、おなじことがいえるのではなかろうか。ペラクルス州がエスパーニャ植民

者によってメキシコで最初に開拓された地域であったがゆえに、メキシコ経済の特徴をきわだたせた縮図を示しているように思われる。

(在メキシコ・海外調査員)

調査研究双書

アジア経済研究所刊行

高梨博昭編

フィリピンの金融事情

410頁 2000円

フィリピンの金融制度について、その背景と発達の歴史を概観し、各種金融機関の実態、金融政策、為替管理、開発のための資金調達機構などにつき、できるだけ網羅的に解説し、それぞれの特徴について明らかにする。

山本秀夫・野間清編

中国農村革命の展開

400頁 2000円

本書は、1920年から60年代を軸として、農村社会構造の把握、農民革命・土地革命の特質、集団化の必然性、諸矛盾の展開とその解決、人民公社と所有制の問題等、新進気鋭のきめ細かい論文で構成されている。

斎藤一夫編

台湾の農業上・下

各 1800円

戦後急激に復興した台湾経済の歴史的経過をふまえ、その背後で着実・健全に発展した「模範生」台湾農業の、現時点における問題点・矛盾点を分析、究明し、国際的位置づけの中で台湾農業を総合的にとらえる。

南亮三郎編

韓国人口の経済分析

240頁 1700円

可能な限り古い時代の人口記録まで遡り、韓国人口の増加趨勢や増加パターンを明らかにしながら、朝鮮動乱の災害から立ち直り1962年からの5カ年計画以後の経済成長のかけに潜む幾多の経済的・社会的問題をえぐり出す

アジア経済出版会発売